

教師の十箇条

二〇一七年四月二十六日

バイブル・サービス

遊 佐 重 樹

「マタイによる福音書」一八章一〇節〜十四節

「迷い出た羊」のたとえ

これらの小さな者を一人でも軽んじないように気をつけなさい。言っておくが、彼らの天使たちは天でいつもわたしの天の父の御顔を仰いでいるのである。あなたがたはどう思うか。ある人が羊を百匹持っていて、その一匹が迷い出たとすれば、九十九匹を山に残しておいて、迷い出た一匹を捜しに行かないだろうか。はっきり言っておくが、もし、それを見つけたら、迷わずにいた九十九匹より、その一匹のことを喜ぶだろう。そのように、これらの小さな者が一人でも滅びることは、あなたがたの天の父の御心ではない。

今日は「教師の十箇条」というテーマでお話ししようと思います。私が七年間のアメリカ留学を終えて帰国し白百合で働き始めたのが一九九五年十月一日でしたから、白百合での日々も二十年以上が経ちました。

一九九六年四月、女子大の開学とともに、私も教壇デビューを果たしました。自分のような人間に学問を教えら

れるのだろうかという不安と、アメリカで身につけた自分の実力を、思う存分発揮するのだといった気負いが入り交じったデビューでした。最初の授業は短大英語科二年生の発音の授業でした。事前に入念な準備をして初日を迎えました。想像以上の緊張で、実は散々なデビュー戦でした。教室のドアを開けたとたんに、女子学生四十名からレーザービームのような視線を浴び、頭の中が真っ白になったことを覚えています。そして早口の授業を終えてフラフラと自分の研究室に戻り、しばらく椅子に座ってぼう然としていたことを思い出します。今となっては笑い話ですが、「職業を間違えたかな」と最初の数週間は悩んだほどです。が、私は面の皮が厚いのか、はたまた人間というのは、どんな環境にも適応できる動物なのか、なんとか今日まで続けてこられました。

私は七人兄弟です。両親は、いろいろな夢や希望を抱いていたようです。つまり、七人の子どもの将来の職業について、教育者、聖職者、医者といった具合に。子どもたちは全員見事に親の期待を裏切りまして、全く異なる世界に進みました。ですから、廻り道したものの、私が教員になったので、とても喜んでいました。

教師になって二十年以上経ちますから、そろそろ教育について語る資格も出てきたのではないかと思います。先日、手紙の束を整理していたところ、二年前に他界した父から私の教壇デビュー直前に届いた手紙が出てきました。聾学校や私立高校で長年教鞭を執った父が、七人の子どもの中でたった一人、教育の世界に入った私にエールを贈るつもりで、教壇に立つ者としての心構えを教えてくださいました。それが本日のプリントに書いてある「教師の十箇条」です。読み返してみると、なかなかいい内容だったので、教育一筋だった父からのメッセージを、皆さんと共有したいと思います。

一番「どの学生にも公平に当たること」。教師は自分の教える教科に優秀な学生を目に入れたがりますが、そ

れは他の学生たちに反発心を抱かせます。誰もが納得するような時だけ、皆の賞賛を代弁するような形で行いたいものです。公平であれば、多少の厳しさにもついてきてくれます。そして、どの学生にも、よく声をかけてあげることが大切だとも思っています。

二番「全体の前では、個人に対して恥をかかせないこと」。自分がされたら嫌ですから、当然ですね。

三番「皮肉は絶対に言わないこと」。皮肉を言ってしまうと、間違ひなく嫌われるそうです。言うべきことは直球で言う、ということですよ。

四番「褒め上手になること」。人間は誰でも褒められたいものです。たとえ小さな努力でも、それを見つけて褒めることによって学生に自信を植え付けることができます。

五番「講義の中で息抜き話題を取り入れること」。我々教師にとりましては、九十分の授業ですが、学生たちにとっては、その日四コマ、あるいは五コマあるうちの九十分かも知れないわけで、集中力はそうそう持続しません。息抜きは大事だと思います。話題として、特に教師の失敗談というのは学生を安心させるよう、どんな人間も恥ずかしいような失敗を繰り返して成長するものなのだと、話してあげるようにしています。緊張している学生がいたら、僕の白百合デビューの日のことや、結納の日、箸を持つ手があまりにも震えて、目の前に並んでいた料理は、スプーンで食べる茶碗蒸しとプリンしか手をつけられなかったことなどを話すと、教室全体がぐっと和んで、いい雰囲気になります。

六番「話題は常に上品であること」。下品な話で一瞬笑いをとったとしても、陰で冷たく笑われるだけです。

七番「不用意な冷笑は絶対にさけること」。この世の中に何の劣等感も持たない人間は存在しません。それは、本人の意志や努力と関係のないことだからです。誰にとっても劣等感とは致命傷になりますから、他人に悟られ

ないように表面を繕っているのです。実は僕にも出生の秘密がありまして、何を隠そう「デベソ」なのです。何かの瞬間におへそが見えた時には、冷たく笑わないでくださいね。

八番「どんなハプニングにもユーモアで対処すること」。ユーモアのセンスを身につけると、実に寛容になります。いちいちつまらないことに腹が立たなくなります。大きな声で叱る前に、ぐっと一息呑み込んで、余裕を取り戻し、暖かいユーモアで学生の態度に変化が見られるように切り返したいものです。しかしこれは人間としての器が求められることで、高度な技術が必要とするので、私も日々修行の身であります。

九番「学生から授業に関するアンケートをとり、反省材料にすること」。本学でも授業評価の制度が整っていて、大変結構なことだと思っています。長いこと教壇に立っていると、いつの間にか自分の授業に自分自身が慣れきってしまったって、授業を受ける側の気持ちに気づきにくくなってしまいます。否定的な意見を書かれるのは確かに怖いのですが、次の学期にそれをクリアすれば、一步向上となるわけで、教師のそうした謙虚さは必ず学生にも伝わりと信じています。

十番「若年寄にならないこと」。若いうちから（いつまでを若いというのかわかりませんが）、しかめっ面をして権威を高めるような哀れな保身術を使うなと書いてありました。

今、こうして父からもらった十箇条を読んでみますと、日頃気をつけているつもりでいても、ハッとさせられる項目もあり、何事も基本に忠実でいることの難しさも感じています。

さて、本日朗読しました聖書の箇所は、大学に例えるなら、本学に入学した学生の一人ひとりを「かけがえのない存在」ととらえて接していくべきであると教えてくれているようです。「かけがえのない存在」としての本学の

学生たちが、いつも、そしていつまでも、心豊かな人生を歩んでいけるよう、教師としての自分自身も精進していくことの重要性・必要性を感じています。教育一筋だった父から教えてもらった十箇条と合わせて、心がけたいものです。もしもこの内容を一つでも守れていないようなことがありましたら、ご遠慮なく指摘していただければと思います。教育は教員と学生がお互いに評価しあって向上させていくものだと思いますので、互いに頑張って参りましょう。

(人間発達学科准教授)